

# Symposium 2016

厚生労働省委託「平成28年度若年技能者人材育成支援等事業」

現代の名工のシンポジウム

## 現代の名工が「ものづくり立国」 日本に果たしてきた役割と今後を考える

実施報告書

日時 平成28年11月8日(火) 13:00~16:00

場所 ベルサール半蔵門 イベントホールA

第1部：基調講演「下町ボブスレー」世界に挑戦

第2部：パネルディスカッション

一般社団法人 全国技能士会連合会

中央技能振興センター

 中央職業能力開発協会

# 主 催 者 挨 拶

本日はご多忙のところシンポジウムにご足労いただきまして、誠にありがとうございます。主催者を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

この「卓越した技能者」、いわゆる現代の名工の表彰は、昭和42年が最初で、この間5,800名あまりの方を表彰してまいりました。今年は50回目となり、11月21日に新たに160名の方を表彰する予定です。この方々を含めてこの50年間に約6,000名の現代の名工を表彰し、ご支援してきたところです。現代の名工の方々は、各界の技術、技能の第一人者で、まさにものづくり立国日本の技能の発展、伝承に多大なるご貢献をしてくださいました。

現在、人口減少あるいは後継者不足などで、日本の産業は大変厳しい環境にあります。ある意味では、大きな曲がり角に来ているともいえます。こういう状況の中で技能をいかに伝承していくか、また技能を引き継いでいく若年技能者をどうやって育成していくかというのは大変大きな課題です。われわれ厚生労働省のみならず政府を挙げて、また各界の皆様方のご支援をいただきながら、技能の伝承、後継者の育成にどのように取り組んでいくべきか努力しているところです。現代の名工の方々のこれまでの取組みや成果を振り返るとともに、現代の名工を通じた今後の技能の伝承、人材の育成などについて皆様方にもぜひ一緒に考えていただきたいと思います。そのために、今日はこれまで受章されました現代の名工の方々にお集まりいただき、パネルディスカッションをしていただくことになっております。

また、パネルディスカッションに先立ち、基調講演として本日は大田区の細貝社長に下町ボブスレーにまつわるお話をおうかがいすることになっております。ぜひ皆様方の参考にしていただければと思います。

先ほど申し上げたような今後の技能の伝承あるいは人材の育成、後継者の育成という大きな課題について、われわれも引き続きしっかり取り組んでまいりますので、ぜひ皆様方のご支援、ご協力を賜りますよう切にお願い申し上げます。本日のシンポジウムがそうした課題を一緒に考えていくきっかけになればと思っております。

厚生労働省職業能力開発局審議官

**和田 純一 氏**



# CONTENTS

## 主催者挨拶 ..... 2

厚生労働省職業能力開発局審議官 和田 純一 氏

## 第1部：基調講演 ..... 4

### 「下町のボブスレー」世界に挑戦

株式会社マテリアル 代表取締役社長 細貝 淳一 氏

## 第2部：パネルディスカッション ..... 14

### 「現代の名工が果たしてきた役割と今後について」

#### 司会進行

ものづくり大学名誉教授 細田 保弘 氏

#### パネラー

株式会社栗田建設 栗田 純司 氏  
(平成12年度表彰 石積工)

株式会社デンソー技研センター 田上 俊一 氏  
(平成17年度表彰 フライス盤工)

有限会社インテリア イイジマ 飯島 勇 氏  
(平成19年度表彰 室内装飾・壁装工)

職業訓練法人香川県和裁職業訓練協会 長尾 理恵 氏  
(平成25年度表彰 和服仕立職)

三菱重工業株式会社 平野 利一 氏  
(平成27年度表彰 製かん工)

# 「下町のボブスレー」世界に挑戦

株式会社マテリアル 代表取締役社長 細貝 淳一 氏

## 加工が付加価値を生む、究極の下請けになりたい

私は、ものづくりが好きでこの業界に入ってまいりました。私は大田区の南六郷というところに育ちましたが、その頃は右にも左にも町工場がたくさんある地域でした。18歳のときに定時制高校に通いながら材料販売の会社で働いていました。そのときに100円の材料を8円の利益で、フライスの加工をやっているおじさんに売っていました。そのおじさんは、フライスを使ってその材料をすごく精巧な骨組みのようなものに加工していました。これはいくらで売れるのですかと聞くと、「僕は10万円でこれを売るんだよ」と話してくれました。そのときに私は思いました。付加価値というのはすごいものなんだと。そして、材料を売るだけではなくて、加工もできる会社をつくりたいと思ったのです。それが、ものづくりの会社をつくりたいと思ったきっかけでした。

材料を売る会社にとって、加工している会社がすべてユーザーになると気付いたのです。そこで、どんな技能の方にもどんな技術者の方にもお会いできるチャンスがあるのではないかと思います、材料と加工の会社を始めました。

最初は畳3帖くらいの工場を借りて、フライス1台で始めました。切断機1台で材料を売っていたのですが、当時私が独立したときには、フライス1台で100万円くらい稼げました。いまはISOやJIS Q9100などの認証取得をしないと、大手企業がなかなか仕事をくれません。認証取得した後でも、維持費が非常にかかるようになってしまいました。いまはものづくりに非常にコストがかかるようになってしまったと思います。

しかし、私は、やはり日本のものづくりというのは、安全・安心を確実に保証するのがグローバルスタンダードになっていると思うのです。そこには、スピードという価値と思考というものがあ、良いものをより早くつくろうとするのが私たちのものづくりの使命なのではないかと思います。

現在、私は従業員30名の会社を経営しています。40年前の旋盤をいまだにフル活用しているような会社ですが、いまはもうFMS（フレキシブル生産システム）の時代です。ものづくりに携わる人が高齢者になってしまい、なかなか若い人たちがものづくりの世界に入ってきてくれません



## PROFILE

## 細貝 淳一 氏

1966年生まれ。

材料販売会社の営業経験を基に、1992年 有限会社マテリアルを設立。順調に事業を拡大し、1996年には、株式会社に組織変更。現在代表取締役。

東京都大田区に、本社・テクニカルセンター・プレートファクトリー、3つの拠点をもち、アルミの切削加工分野において、リーダーシップを発揮している。

品質・納期に軸足を置いたポジショニングで、競争優位を築き海外とも戦える事業基盤を率先して構築している。自社工場は大田区優工場にも認定されている。ISOの取得に対しても自ら積極的に取り組み、2007年ISO9001取得、2009年ISO14001取得、2011年JISQ9100取得と品質・環境の面でも継続的な改善を行っている。

社内外の人材教育にも積極的に取り組み、「戦う技術集団」を育て上げている。また日本（地域）の「ものづくり」の発展と継承のために講演活動やインターシップの受け入れにも応じ、社会貢献している。

2011年 下町ボブスレーネットワークプロジェクトを立ち上げ、推進委員会を発足。大田区町工場の技術を集結し「下町ボブスレー世界に挑戦」を目標にそりを開発。

2018年冬季オリンピックにて、下町ボブスレーの機体がジャマイカボブスレーチームに採用決定。

ので人材を育成しなければいけないという課題があります。私は、その当時大手企業と取引をさせていただいていましたが、私たちに技能を教えてくれたのはその企業の現代の名工の方でした。私はそのときに、メーカーになって頑張ろうというのではなくて、究極の下請けになりたいと思いました。大手企業がここに頼めば大丈夫だというような会社をつくりたいと思ったのです。

私が下請企業でありながらFMSという無人化の機械を入れたのには理由があります。われわれのような中小企業の数少ない技術者の中に新入社員が入ってくると、必ず第一線のエースが指導しなくてはなりません。そうすると、人を育てるために生産性が非常に落ちてしまい、売上げも落ちてしまいます。そこで、こういった無人化の機械を使って、エースを人材育成に回すようにしています。

人を育てるためには何が必要なのだろうか。経営者は、正直申しまして人を育てられません。一番大切だと思うのは、人が育つ環境をつくるのが私たち経営者にとっての投資なのではないかということです。自己啓発をして、自分たちはものづくりが楽しくて仕事をしている、それが社会貢献の1つにもなっている、日本のためにもなっているのだ、という使命感を持たないと、人はなかなかものづくりの世界に入ってくないと思うのです。

その中で注目したいのが検査装置です。よくお客様から、検査装置があるから保証されていいですねと言われる。しかし、私はそうは考えていません。自分がいまつくったものの数値をプラスマイナス100分の1にしたいと思った場合には、真ん中である0を狙っているわけです。しかし、0を狙ったものの、検査をしてみると逆にプラスになってしまったということもあり得ます。こうしたところは、やはりしっかりとした検査装置で測定したうえでないと自分の力量も上げられないのではないかと考えています。検査装置

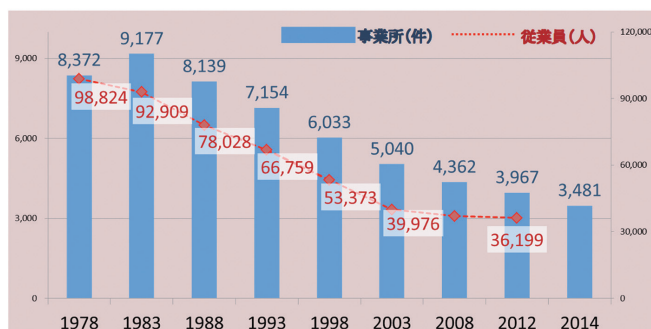
というのは、一番は人を育て、自分が成長するための道具になるのだということを、いま社員教育の中に取り入れています。

私たちの中小企業は、なかなか人が入ってこない業界です。インターンシップなどで、できるだけ学生にもわれわれのやっている仕事を説明したりします。しかし、大事なことは、学生ばかりに説明していてもだめだということです。就職活動で最後に決定権があるのは親なのです。親はやはり良い上場企業に入りなさいということを推奨してきます。けれども、中小企業にも良い会社があります。この点はPRしなければいけません。そこで、最近は親に対するインターンシップも行うようになりました。やはり親の理解を得なければいけないのではないかと考えています。

大田区の製造業は、バブル全盛期の頃は、あれほど小さな町の中で9,177社もの工場があったのですが、現在は3,000社弱くらいに落ち込んでいます。われわれの地域には、海外シフトになった加工部品であるとか、後継者がいないなどの問題があり、だんだん工場数が減少してきました。私が独立したのは25年前ですが、その当時1992年頃、やはりバブル崩壊から2,000社近くの工場が減ったことがありました。当時の私は、会社がなくなるのはライバルが減ることだと思って非常に喜んでいました。けれども、年々減っていくのが加速していくわけです。われわれの地域というのは、実は「仲間回し」というのを得意としています。たとえば特殊なメッキをやる会社、非常に細い穴を開ける会社、研磨の非常に得意な会社などがありますが、そうした会社が連携をしながら1つの製品をつくっているのが大田区のものづくりのスタイルなのです。倒産していったり、廃業していったりする会社というのは、実はすごく技術に対して向上心のある会社であって、そうした会社がどんどんなくなっていくのです。

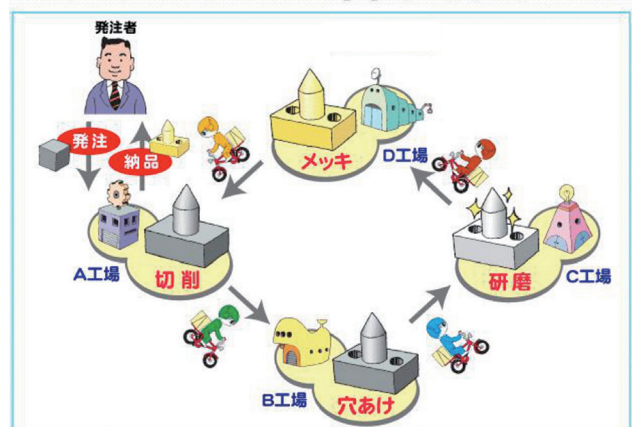
## 大田区製造業の事業所・従業者の推移

- 事業所数は1993年(9,177件)をピークに以降減少を続けている。
- 従業者数は1978年(98,824人)から減少している



資料)経済産業省「工業統計」より作成

## 大田区の仲間回し



# 大田区から世界へ ボブスレー製作への 挑戦



新しい加工にトライするためには、新しい事業をつくったり、新しい加工機を買ったり、新しい工具を買ったりするわけです。しかしながら、時代の変化で、製品単価というのはだんだん下がってきています。われわれの地域には、損益分岐点を割ってでも技術を向上させようという向上心のある先輩方がたくさんいたのですが、採算が合わなくなってやめてしまった会社もたくさん出てきました。そこで、これ以上われわれの地域から先輩方や仲間を失うわけにはいかない。どうすればものづくりというものが世の中に認められるだろうか。私たち中小企業がPRする場をつくらなければいけないのではないかと思います。自分たちも、ただものづくりをして、自己満足の世界で、技術だ、技能だと言っているわけにはいかないのです。

いまは、日本の市場だけではなかなか仕事が満足に潤っていかないような時代になっています。われわれの地域は、羽田空港という強力な世界へのロジスティクスを持っていますので、私たちの技術力というものを世界中に配信することができて、もしも受注がくればいくらでも発

送ができるのではないかと思います。どんなものでもつくって出しますよと言うことができる、そのためにはPRが必要ではないかと思ったのです。そこで、大田区から世界へということを強く考えました。

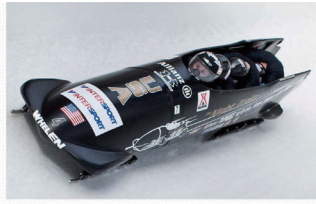
私が独立したばかりの頃、決算書の1年目がないため銀行からお金も借りられず、仕事がないので、図面もなかなかいただけなかったことがありました。工具も買えませんでした。そんなときに、隣の工場の人たちは、工具が買えないならうちの工具を使いなさいと分けてくれたのです。また、仕事がないときには、図面もその先輩方が私たちに提供してくれました。大田区というのは、そうやって私たちが育てられた地域なのです。私は、この地域をもう一度醤油の貸し借りができるような地域にしてみたいと思うのです。そうしますと、やはり1つの志をもって1つの集いをつくらないことには、自分たちの技術をオープンにできないのではないかと思います。そのためには何か世界に通用するようなものづくりをしたいと思います。

そこで選んだのがボブスレーです。なぜボブスレーを選んだのか。それは、必ず世界中が注目するイベントを選ばなければいけないと思ったからです。世界中が注目するイベントといえば、やはりオリンピックだと思います。そこでオリンピックで使われる道具、これが私たちの一番のPRポイントになるのではないかと思います。もう1つは大手企業が参入していない分野を選びたかったからです。日本の大手企業というのは、やはり素晴らしい技術力や開発力を持っています。中小企業の資本力では、大企業に対してチャレンジしてもほとんど勝てる見込みがないものに挑戦するのと同じことで、やっても仕方がないわけです。また、日本同士で争ってもいけないのではないかということも考えました。そこで、大手企業が参入していないものが





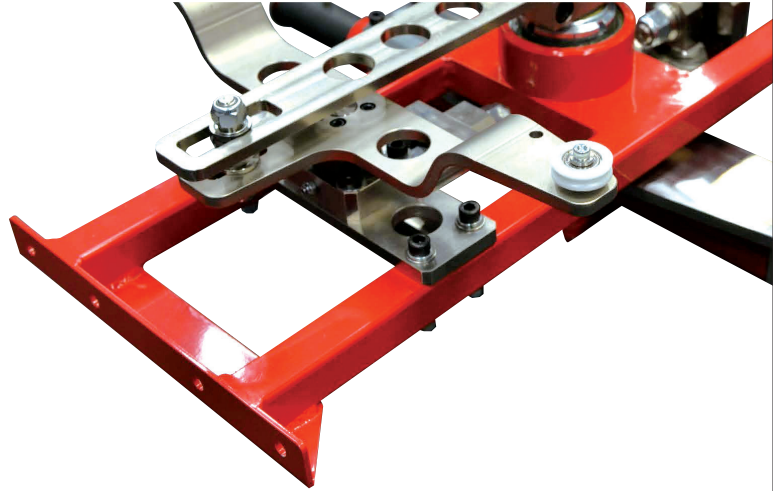
ITALY supported by Ferrari



USA supported by NASCAR



GERMANY supported by BMW

ENGLAND supported by Royal Air Force  
(イギリス空軍ボブスレーチームはオリンピックには参加していません)

まず原則となりました。

もう1つは炭素繊維に関わりたいという想いがありました。大田区には会社が3,000社ほどありますが、炭素繊維を中心にしたものづくりをしている会社は1件もありませんでした。航空機のボディが炭素繊維になったり、いろんなものが炭素繊維に変わってきている時代です。金属加工だけをやっているというのでは、これからのものづくりのための知識が薄くなると思ったのです。そこで、みんなで一緒に共同開発をしながら、その技術を学ぼうと思いました。先輩方はすごく良い技術を持っていますが、もう一度座学をやりましょうと言うと、途端に尻込みをしまうのです。そうしたときには、むりやり先輩たちも引きずり出しながら、私たち後輩も一緒になって、なんとか炭素繊維を学びながらオリンピックを目指したいと思ったのです。こうして、ボブスレーというものが面白いと思うようになったのです。日本ではつくったことはあるけれども製品化したことはない、世界で戦ったこともないということになりますと、意外と私たち中小企業にもできるのではないかと思ったのです。

われわれの地域には、戦闘機の部品をつくっている会社があったり、F1の部品をつくっている会社があったり、いろいろな気象衛星のセンサーをつくっている会社があったり、実際に品物をつくっている中小企業がたくさんあるのです。こういう技術を結集すればこれくらいのものは何とかなるだろう、という安易な考えからスタートしたのがボブスレー製作でした。一番良いと思ったのは、やはりやるならば相手が強ければ強いほど良い、日本同士が戦うのではなくて世界と戦いたいということでした。イタリアではフェラーリ、アメリカではいまやBMWが、またドイツでは国家戦略が変わってからは国が、そしてイギリスではイギリ

ス空軍が、それぞれボブスレーをつくっています。こういった技術を持ち寄りながら行われているのがヨーロッパで非常に盛んなウインタースポーツ、ボブスレーです。この名だたる会社を打ち負かしたら、私たちは非常に有名になれるのではないかという単純発想で始めたのです。

#### 《15分間の紹介映像》

この紹介映像では、2012年の最初の試験滑走で、同じコースで行われた前回の全日本選手権の記録(56秒26)を上回る記録(56秒16)でゴールしたこと、そしてその10日後に開催された全日本選手権でさらに記録を伸ばし、試験滑走の記録を1秒以上更新したことを紹介。

紹介映像の最後で、細貝社長は、自分たちのつくったボブスレーには日本人に乗ってもらいたいと強調。

#### つかみかけたソチオリンピック出場への夢

いまご覧いただいた映像の最後で、私は、自分たちのボブスレーには日本人に乗ってもらいたいと訴えました。しかし、実は今年の10月5日に記者会見をして、自分たちのつくったボブスレーをジャマイカにプレゼントすることにしました。映像の中で言ったことと違うと言われてしまうかもしれません。しかし、この映像でお話したとおり、私の最初の想いというのはまったく変わっていません。私は、オールジャパン体制をもう一度復活させたいと考えています。

このジャマイカにプレゼントすることに関連して、少しお話をしておきたいと思います。

ボブスレー競技では、オリンピックの選手は開催される

年の2年前に決まり、オリンピックで使うそりも2年前に決めてしまうことになっています。以前、私たちは、ある社長から、「細貝さん、技術というのは、いまできているものはもう古いのですよ」、「2年も空いている間に僕たちの技術は進化するから、必ず日本でいいそりができるはずだから」と言われたのです。

今回、私たちが発表したそりは、実はアメリカのBMWの技術者と私たちの技術力を結集したような、両方のいいところを取ったそりで、これを導入することにしました。来年の2月にワールドカップがありますが、これにジャマイカの選手が出てくれます。

ここに1つ朗報があります。前回の2014年から2015年のシーズンで、アメリカのボブスレーの女子パイロットだったジャズミンさんという方が、今回ジャマイカに帰化しているというのです。ソチオリンピックでのジャマイカの順位は、男子チームしか出ていませんでしたが、最下位だったのです。今回、もし女子チームが平昌オリンピックに出るとなると、ジャマイカのボブスレーとしては女子選手がはじめて世界戦に出るということになるのです。私たちもこの間選手の身体能力をジャマイカに行き見てきましたが、やはりすごく足の速い人、女子でも100メートルを10秒台で走る人たちがたくさんいるので、これですごく良いエンジンと良いそりと良いパイロットが手に入った、といま思っています。

話を戻しますが、いまご覧いただいた映像の中で紹介しましたように、私たちのそりが、全日本選手権で試験走行のときよりも1秒も速い記録を出したということは、20～30メートル以上差を付けるということになります。そうすると私たちも期待感が高まってきました。もうソチオリンピックは完璧だと思っていました。そのときわれわれは、実は女子をターゲットにしていたのです。というのは、男子チームの世界戦の順位とタイムを考えると、いくら努力しても勝てないようなタイム差だったのです。3回レースをして何分も変わってしまうのです。ところが、女子をリサーチしてみると数秒の差でしたので、これなら乗りやすいそりをつくって女子チームが頑張ってくれば、もしかしたらメダルが取れるのではないかと考え、女子に賭けることにしました。しかし、われわれのそりが仕上がったところ、ボブスレー連盟（日本ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟）から言われたのは、男子チームしか出しませんということでした。

ボブスレーというのはお金もかかります。そり1台をアメリカに輸送する場合、大体輸送費で200万円、カルネの申請で支払う補償金が100万円です。1台運ぶのに300万円かかるわけです。ボブスレー連盟の費用ではそれが出せないということから、男子1チームが出ることになり、私たちは今度は男子に切り替えなければいけなくなりました。そのとき、ソチオリンピックまであと1年しかありませんでした。これから世界の車検を取ってオリンピックで使えるようにするには、そのそりをもう1回新型に開発して、男子用のそりをつくらなければいけないということになったのです。私たちは女子、女子と言ってきましたが、男子のトップアスリートに私たちのそりに乗って、ソチオリンピックに出てくださいとお願いをしたのです。けれども、女子、女子と言っていたじゃないかと言われて、結局もう1回つくることになったのです。

急いでそりをつくったところで、車検を取りにヨーロッパへ行ったり、いろいろ転戦しながらやるにはもう時間がありませんでした。そこで2台のマシンをつくって、1台は日本に残して、もう1台はヨーロッパの遠征に出して、そこでもしもレギュレーション違反があった場合には、日本に残したものを修理して、最後ソチオリンピックに間に合わそうという計画にしました。なんとか2台をつくるということから、男子チームには可能性を一応残していただき、私たちと組むことになったのです。ソチオリンピックの1年くらい前ですけど、アメリカのレイクプラシッドというところで、そのときにはじめて私たちの1号機に乗って、はじめて私たちのそりが海外戦でポイントを取りました。このスケジュール感でやっていこうということで、ソチオリンピックまでにはなんとかしようじゃないか、4～5か月でなんとかそりをつくってしまおうという話になり、完成したのです。

私たちはスポンサーを一生懸命集めていたのですが、なかなか信用がありません。中小企業に何千万円ものお金を振り込むなどということは大企業はしません。そこで信用をつかむためにはどうしたらよいかということに、ちょうどタイミングよく安倍晋三さんが総理大臣になり、光栄なことに施政方針演説の中で、大田区のみなさんが下町ボブスレーというプロジェクトで頑張っているということを話してくださったのです。中小企業政策をドーンと打ち出してくれたおかげで、いろいろなスポンサーが集まり、5,000万円の費用が一気に集まったという奇跡的なことが起きたのです。そこで、包括協定というものをボブスレー



連盟と正式に締結して、必ずソチオリンピックに行こうと  
いうことを約束して、記者会見を開きました。

私たちは、やはり開発にはいろいろなそりを見なければ  
いけないということから、ソチオリンピックの1年前にプレ  
オリンピックに行き、世界のそりが並んでいるスタートの  
ところで、世界のそりのフレームをすべて撮影してきました。  
世界のそりの写真を眺めながら、私たちの2号機をきち  
んとつくり、私たちのイメージでつくった新しいハンドリ  
ングシステムもどんどん開発していきました。フレームも丸  
管を使うのではなくて、ひし形のものを使って振動吸収を  
するとか、いろいろなことを考えながらつくっていった2号  
機がついに完成しました。ここからソチオリンピックを目  
指そうと風向きは順風でした。

新型そりができてソチオリンピックまであとわずかとい  
うときに、頑張っポイントを取ったら私たちも一緒にソ  
チオリンピックに行きましょうと、選手そしてボブスレー連  
盟と共同記者会見を開きました。これがソチオリンピック  
の4か月前のことです。

それから調子に乗って下町ボブスレーの本を出版したり、  
下町ボブスレーのドラマ化も決定しました。メディア掲  
載も順風でした。テレビ放映が798回あり、いろいろなど  
ころに取り上げられて、スポンサーのフォローをすること  
にも大成功しました。大田区の統計では13億円の広告効果  
があったということになりましたので、なんとかここまでは  
うまく進んでいました。ところが、11月26日にソチオリ  
ンピック不採用ということになったのです。これは、もともと  
ラトビア製のそりと戦わなければいけないのを私たちが  
まったく知らなかったからです。包括協定をしているので、  
一緒にソチオリンピックに出ましようということですがに約  
束しているものと思込んでいました。しかしながら、ラト

ビア製のそりと戦って勝ったほうがソチオリンピックに行く  
ということになっていたのです。しかし、私たちはレースをし  
ていません。レギュレーション違反だと言われて、結局われ  
われのそりが使われなくなってしまったというだけなので  
す。ですから、ラトビア製のそりと一度勝負してみたいと思  
いました。この1か月後に全日本選手権がありますから、そ  
こでラトビア製のそりと勝負をしたいと思いました。しか  
し、そのためには改修作業をする必要があったのです。

## ラトビア製そりとの勝負——全日本選手権へ

メディアが集まって、チーム全員が心地よくインタビュー  
を受けながらプロジェクトに取り組んでいたときには、  
200社の大田区の町工場が集まっていました。しかし、ソ  
チオリンピックに不採用になって、今度は改修作業をただ  
でやらなければいけないということになったとき、200社  
が17社にまで減ってしまいました。このときにチームに  
言ったのは、私たちがなぜ下町ボブスレーをプロジェクト  
としてやり始めたのかという趣旨をちゃんと考えようとい  
うことでした。ものづくりをどんどん広めていこう、自分た  
ちの地域のPRをしようということではなかったか。お互  
いに近隣との連携をきちんと取ろうというのが趣旨だった  
はずです。そのため、去っていった人間の悪口を言うのを  
やめようということを決めました。入口を広く、出口も広い  
集いにしようということのみんなで約束したのです。

この全日本選手権の勝負に出て、私たちのそりの性能  
を少し高めたものをきちんと評価してもらおうと思いま  
した。しかし、当時この全日本選手権では、ナショナルチ  
ームはわれわれのそりには乗れませんでした。というのは、  
ソチオリンピック2か月前に私たちのそりで優勝したら、  
世論がすごく騒ぎます。なぜうちのそりを使わないのだと





ということになってしまいます。ですから、これは暗黙の了解で、われわれのそりにはトップ選手たちはみな乗りませんでした。そこで、乗ってくれるパイロットがいなかったの、ないものはつかんでくるという私たちの信条で、長野オリンピックまでさかのぼって、当時パイロットをやっていた現在48歳のパイロットを連れてきました。今度は押す人もいないので、それならばなんとか足が速くて体重の重い人を呼んでこようということで、足が速くてパワーのある選手を引っ張ってきました。ですから、1人のパイロットは17年ぶりにパイロットをする人、後ろで押す人は1度もボブスレーをしたことがない人、このメンバーでわれわれはナショナルチームに戦いを挑むということになりました。

パイロットは普通ハンドルを持って、両手で支えながら走っていくことをします。ここで注目していただきたいのは新しいパイロット技術です。このパイロットは逆側にいます。この人は、練習滑走のときに3回しかブレイカー（押す人）が練習していないにもかかわらず、2位の成績で練習滑走を終えたのです。「細貝さん、もしかしたら俺たちは勝てるかもしれない」と彼は言っていました。本番の1つ前のレースでテストして走っていくという一番最後に乗る試験滑走があるのですが、このパイロットは、そこで一生懸命にそりをギュッと押した瞬間に、左足の肉離れを起こしてしまいました。そのため、まったく走れない状態になってしまいました。それでも後ろから学生が一生懸命に命がけで押してくれているので、何とか逆側に乗って、少しでもパワーを伝えたいということから、このような走り方になったのです。このときに私たちは奇跡を起こして、ナショナルチーム2チームのうちの1チームを抜いたのです。

70キロで坂道を走り出すのと100キロで坂道を走り出すのでは、どちらが最高速度が出るかということになっ

たら、間違いなく100キロです。それくらいのタイム差があったのですが、彼のパイロット技術と私たちのそりの性能で、この日の最高速度では私たちのそりが1位になったのです。この2人は、やはり加速度がなかったのでナショナルチームの一番手にはなれなかったのですが、このとき2位になったことが、私たちが平昌オリンピックに行くのだというマインドに駆り立ててくれたのです。やはりここでも人との出会いがありました。こうして、再挑戦ということになり、またオリンピックを目指すことになりました。

### 数値化したそりの製作に挑戦

私たちは、これまで日本人選手からそりのことをたくさん聞いていたのですが、これだけでは原理原則を間違っていると思いました。やはり、世界のトップチームにそりのことを聞かないと良いそりができないのではないかと思いました。そこで、全日本選手権から数日しか経っていませんでしたが、ドイツのメダリストを長野に呼んで、そこでわれわれのそりの検証テストをして、いろいろなアイデアをもらいながら、次のそりへの技術投入をしていくことになりました。

私たちがボブスレーをつくっていて、中小企業らしいと思ったことが1つあります。私たちはボブスレーをつくっているときに、何の数値化もないままつくっていききました。普通は感覚的なものを具体化していくのはとても大変なことです。そこにはどれだけのG（重力）がかかって、どれだけの強度をもたせるかという計算をしていかなければいけません。数値があってこそそりができるわけですが、私たちが日本人選手から聞かれたのは、「あそこの8コーナーで曲がるときに、ここが少しやわらかいから、硬くなるようなそりをつくってくれる？」ということでした。そうしていろいろと試行錯誤をしながら手作業でつくっていったのが、実は1号機から3号機までだったのです。その教訓を活かして、今度は、ドイツ人来てもらい、いままでの検証テストのデータをもらいながら、私たちは真理値の解析をして、余裕値などを大手企業にしっかりと勉強させてもらいながら、数値化したそりをつくることになりました。

いろいろなテストをしたり、いろいろなことを世界中の人たちに見ていただくために、いろいろなところにそりを持って行きました。そんなとき、いきなり連盟からそりのテストをしますといわれたのが去年の11月でした。ここにそりを持って来れば検証テストをしてやるからということでした。私たちのこれからのトライ、つまりオリンピックを目指



すためには、どうしてもその戦いに勝たなければいけません。そこで出てきたのが、やはり海外のそりとの勝負だったのです。

私たちは日本でやりたいということを強く要望しました。私たちはそり1台持って行って、そのそりだけで勝負するというわけにはいきません。勝負をするのであれば、やはり5台のそりの中で一番環境に合ったものを選んで勝負をしたいと考えたからです。5台のそりがあるところでやれば、輸送費と人で3,000万円もかけて持って行かなくても済むということを私たちは要望したのです。しかし、ボブスレー競技というのはどうしてもヨーロッパが主体なので、ヨーロッパで勝負をしてくださいということになり、ヨーロッパにそりを2台だけ持って行って勝負に挑んだわけです。連盟からは、採用テストの概要について、2015年の11月13日（金）19時から、ドイツのケーニヒゼーというところでテストをやり、1日だけの勝負で決めます、ということが伝えられました。しかし、実際には14日もテストを行うことになり、1日目は、ドイツ製そりと下町のそりがそれぞれ2本ずつ滑走し、2日目には、ドイツ製そりと下町のそりがそれぞれ3本ずつ滑走することになりました。

1日目の11月13日のテストの結果ですが、1本目のドイツ製のそりの最高速度は時速109.968km、日本の下町のそりの1本目は110.749kmになっています。次に2本目ですが、ドイツ製のそりは時速110.749km、下町のそりの2本目は111.574kmになっていますから、われわれのほうが速度が速いです。いろいろ見て不可解だと思うのは、ずっとわれわれは加速していきながら、タイムが上がって勝っているのです。ところが、最後の計測のときに負けて

いるのです。ここで肝心なのは、加速度はわれわれのほうが早く、速度も速いので、ラップ的にはポイントの位置からどんどん加速して行って、相手よりも早く光電を切っています。しかし、最後だけはどうしてもタイムが勝てないというところに陥っていくわけです。

海外製のそりを調達してきたのが日本連盟のコーチだったのです。そのコーチが、われわれのそりとドイツ製のそりの両方に乗っているわけです。1日目の結果は勝ちましたが、2日目になりますと、すべてのボルトが緩んでしまいましたので、勝つのはとても厳しい状況でした。私たちの調整不足と資金不足、これでレースに負けてしまったのではないかと思います。しかし、勝敗の記録は僅差でしたので、次はわれわれも勝てるというイメージがありました。この段階で改めて、日本をあきらめて一度世界にわれわれのそりをオファーしてみようということを決めました。

日本連盟ドイツテストのリザルト(単位:タイムは秒、最高速度はKm/h)

1日目 (11月13日19:00)	スタート	1ポイント	2ポイント	3ポイント	4ポイント	ゴール	最高速
1本目(ドイツ製)	8.54	16.74	26.59	42.64	53.81	60.98	109.968
2本目(下町)	8.42	16.47	26.18	42.12	53.37	60.72	110.749
3本目(下町)	8.41	16.46	26.07	41.85	53	60.17	111.574
4本目(ドイツ製)	8.41	16.43	26.14	42.05	53.09	60.06	110.351

2日目 (11月14日19:00)	スタート	1ポイント	2ポイント	3ポイント	4ポイント	ゴール	最高速
1本目(下町)	8.61	16.73	26.24	41.61	52.21	58.71	113.53
2本目(ドイツ製)	8.39	16.35	25.76	40.91	51.23	57.38	114.635
3本目(下町)	8.48	16.51	25.99	41.28	51.86	58.31	113.972
4本目(ドイツ製)	8.41	16.4	25.87	40.99	51.3	57.49	115.058
5本目(下町)	8.31	16.32	25.85	41.48	52.32	58.96	112.183
6本目(ドイツ製)	8.48	16.45	25.91	41.12	51.54	57.82	114.327

### 開発スケジュール 2015年

- 6月22日・26日：新しい下町ボブスレーを作るための製作会議
- 7月26日・8月30日：スケートリンク貸し切り氷上テスト
- 6月～10月：改良型のそりを製作
- 9月16日：改良型ソリの組み立て
- 10月14日：IBSF審査員によるマテリアルチェック
- 11月1日～11月7日：ノルウェーのリレハンメルで新3号機と新5号機のテスト
- 11月17日：2度目の不採用通告
- 11月17日～11月20日：オーストリア・インスブルックにて滑走テスト
- 12月8日：欧州遠征からソリに戻る
- 12月8日～12月10日：大特急メンテナンス
- 12月20日：2015/2016全日本ボブスレー選手権大会

### 開発スケジュール 2014年

- 1月15～17日：ドイツ元代表パイロットによる下町ボブスレーのテスト
- 滑走・性能検証
- 2月16～17日：ソチ五輪男子ボブスレー2人乗り応援・視察
- オーストリア・インスブルック遠征
- ボブスレーを改造したブッシュボブで長野合宿
- 五輪へ向けた方針説明会を開催
- ローラーボブスレー使用
- 合宿でブッシュボブスレー使用
- 製作協力説明会
- 成
- LSFチャレンジカップ大会に2号機出場
- 15全日本ボブスレー選手権

# 再びオリンピックへの夢 平昌オリンピックに向けて



その後の展開についてお話ししますと、新たな海外代表チームによるそりの採用にわれわれが乗り出した瞬間があの日でした。そこでルーマニア、ジャマイカ、オーストリアと世界順位の低いほうから選びながら、われわれのそりを使ってもらえるオファーをしていこうと思いました。実は、私のターゲットは1か国だけでした。ジャマイカです。ジャマイカは身体能力的にも非常に高い国であり、やはり世界一のランナーを抱えているところですから、ボブスレーのエンジンとしても最強です。私は、ジャマイカをやりたいということを内心決めていました。オファーをしたところ、実はこの3か国すべてが私たちのそりを採用しますと言ってくれたのです。しかし、私たちは海外の3か国すべてのケアすることはできないので、1つだけ、ジャマイカという国を選びました。

そこで1月13日にジャマイカ代表チームに来ていただきました。国の機関の方々が、仕事としてというよりも、中小企業を助けていこうという想いを持ってチームを引っ張ってきてくれたのです。1月13日からジャマイカチームが長野に来てわれわれのそりに乗り、これは良いということになりました。そして、口約束ではありましたが、これを使うと言って帰っていきました。しかし、私はやはりきちんと契約を交わさないといけないと思いました。契約はこの後に交わすのですが、このときに来た人は、クリス・ストークスといってボブスレージャマイカチームの監督です。クールランニングという20数年前にあった映画の主人公です。はじめてジャマイカチームが冬季オリンピックに参加することを達成した人です。こうした人々とオリンピックを目指して一生懸命努力しているということで記者会見になったわけです。

私たちは口約束は嫌なので、キングストーン(ジャマイカ)に参内して、向こうの外務大臣とかいろいろな方々と会って、きちんとした署名をしまりました。そこでボブスレーのTシャツを持っていったり、いろいろ違約金の話をしたり、言いにくい話をしながら、日本大使公邸で来賓を50人呼んで、調印式をテレビ中継を交えてやりました。ここでジャマイカとアポイントが取れた瞬間に、完全に私たちのそりは平昌オリンピックに出ることが確実にされたのです。

私がこれまでに会った人たちの中には、リスクを先に考えて、まず断る理由から先に行こうという人が非常に多かったのですが実現するプロセスというものを大事に考えるメンバーと出会うことができたので、「なかったらつくればいいじゃないか、ないものはつくろうよ」という前向きな発想になりました。これはものづくりの最大の特徴であると思うのです。そういう感覚が、私たちのチームにはありました。まさにそのときが、下町ボブスレーというのは世界にも通じるのではないかと実感した瞬間でした。当社の設計部門が一生懸命に頑張っていて、新しい型のそり、下町スペシャルが今年の10月5日に発表になったのです。この右側にいる方が世界第3位のパイロットジャズミンさんです。ボルトのポーズとボブスレーのポーズを一緒にして、記念写真を撮りました。

私には2018年にぜひやりたいことがあります。各スポンサー様の会社のロゴを飛行機に貼って、その飛行機を半年ぐらい飛ばしてから、最後にそれをチャーター機として、平昌オリンピックにたくさんの応援者と一緒に飛んで行きたいという夢です。

また、下町ボブスレーの映画化を実現したいと思っています。オリンピックでメダルを取りたい。日本人がつくったそりで、日本人選手が乗って、メダルを取りたい。ジャマイカという国と一緒に。ジャマイカは、選手たちがすごく心のきれいな人たちですから、ぜひ一緒にやりたいです。私の一番の原点は、日本人のためにそりをつくっているわけですから、日本人と一緒に平昌オリンピックに行きたいです。まだ可能性というのはまったくないわけではありません、あきらめたくないのです。今



回のワールドカップで、もしもジャマイカがメダルを取ることに  
なれば、私たちのそりの評価というのは非常に高まると思いま  
す。ここでなんとか世論が動いて、私たちが実現したいと望む  
オールジャパンというものを達成していきたいと考えています。  
日本のものづくりで日本の選手がメダルを取ることを実現させ  
れば、私たちの一番の夢をかなえるチャンスとなるのではない  
かと思います。

### 人と人との出会いが技術力をつなぐ

私は、人と人との出会いが自分を成長させると思っていま  
す。いろいろなところに出向いて行くと、その方々が自分を成  
長させてくれます。独立創業以来困っているときに手を貸して  
くれた人、この人の恩というのは一生忘れてはいけないのだと  
思っています。すでに80数歳になる技能士の方がいますが、  
その方に15年間私の会社のコンサルタントをしていただいで  
います。すごく考えさせられたことがあります。この方は、「会社  
ではISOを持っています、JISQ9100を持っていますというよ  
うに、いろいろな認証取得をしているけれども社員はどうなん  
だ」ということをよくいわれます。「なぜこの品物をあの子にや  
らせるんだという理由をお前には言えるか」ということを問われ  
たのです。そこで私は、ものづくりで誰に選定したのかという  
理由をつくるためには、技能士を育てていかなければいけな  
いのだ、というように考えたのです。この5年間その先生と頑  
張って、一番頑張ったのは社員ですけれども、11名のマシニ  
ングオペレーターのうち10名が1級技能士になりました。これ  
は彼らにとってもステータスになりますし、国家資格というの  
はもしも会社がおかしくなっても就職するときには引く手あまた

になるわけです。やはり資格というのは非常に大事だと思い  
ます。

技術的には、マシニングセンターでプログラミングをすれば  
形ができるということになります。しかし、実はひずみであるとか  
熱効率であるとかというものを、手で触って感覚で覚えていく  
というノウハウがなければ、なかなか製品の実現はできないの  
です。私の先輩方には、「俺は見た目で100分の1がわかる  
んだよ」と言って、本当にわかってしまう人たちがたくさんいま  
した。私にはそういうことはまったくわかりません。私には、触っ  
ていくつ違うかなどという神業はないです。けれども、そうした  
先輩方と私たちが連携を組むことによって、自分たちの地域、  
ひいては日本の技術力というものを上げていくことができるの  
ではないかと思っています。

私は、日本はなぜこんなに高度成長したのだろうかというこ  
を考えると、日本には資源がないけれども、技術が資源にな  
っているのだと思っています。このことを私は非常に自慢し  
ているのです。ものづくりに携わる会社をつくれたことで社会  
貢献をし、そしてこれからも社会貢献事業をきちんとしてい  
かなければいけないと考えています。私の場合は、皆様と違って  
本当に技術力はありません。しかしながら、その技術力をつな  
げていくということは自分の役割なのではないかと考えて、こ  
れから自分の地域から日本中にそういった連携を生みながら、  
世界と戦っていけるような中小企業の連携をつくっていき  
たいと考えています。皆様とこの出会いを大切に、これからも  
ご指導をよろしくお願ひしたいと思います。

これで私のお話を終わらせていただきます。どうもありが  
うございました。



# Panel Discussion

—第2部—

## パネルディスカッション



### 司会進行・パネラー紹介



#### 【司会進行】

ものづくり大学  
名誉教授

**細田 保弘 氏**



#### 【パネラー】

平成12年度表彰  
石積工

株式会社粟田建設

**粟田 純司 氏**



#### 【パネラー】

平成17年度表彰  
フライス盤工

株式会社デンソー  
技研センター

**田上 俊一 氏**



#### 【パネラー】

平成19年度表彰  
室内装飾・壁装工

有限会社インテリア  
イジマ

**飯島 勇 氏**



#### 【パネラー】

平成25年度表彰  
和服仕立職

職業訓練法人  
香川県和裁職業訓練協会

**長尾 理恵 氏**



#### 【パネラー】

平成27年度表彰  
製かん工

三菱重工業株式会社

**平野 利一 氏**

## 現代の名工として表彰されたことによる、本人の意識や周囲の状況の変化等

**細田** 第2部のパネルディスカッションでは、卓越した技能者=現代の名工として表彰された方々にお集まりいただいております。現代の名工がいままで果たしてきた役割と今後について、ご意見をたまわることになっています。パネラーの皆様より、自己紹介をかねて現代の名工として表彰された職業から、ご自身の知識や周囲の状況の変化などについておうかがいしたいと思います。

最初に、平成12年度に石積工職種で表彰されました株式会社栗田建設の栗田純司様からお願いいたします。

**栗田** 皆さん、こんにちは。私は、滋賀の大津から参りました栗田です。お城の修理などを代々やってきました。私で14代続いております。この石積みというのは、文化財の修復にあたってはなくてはならない仕事だと思って、いままで父親の頃からやってきました。これからも、なおいっそう努力して、この石積みを後世に伝えていきたいと思っています。

**細田** 続きまして、平成17年度フライス盤工職種で表彰されました株式会社デンソー技研センターの田上俊一様、お願いいたします。

**田上** 皆さん、こんにちは。株式会社デンソー技研センターから参りました田上と申します。フライス盤工で表彰いただきまして、主に金属加工が専門の職種になります。

私は、デンソー技研センターで技能指導を担当しています。技研センターの中には、デンソー工業学園という企業内学園がありまして、中卒者の3か年教育の工業高校課程、それから高卒者の1か年教育の高等専門課程という課程があります。そこで私は、学園訓練生に対する、手仕上げや機械加工の指導を主に担当しています。それから、工業高校課程の1年生の副担任も務めています。彼らは15歳から19歳の訓練生になりますけれども、将来のデンソーを担ってもらえるように日々指導に頑張っています。

私もこの工業高校課程の卒業生です。現代の名工で表彰していただいたのが30歳のときです。表彰していただいたことについては、いまは若干重すぎるものをいただいたという気持ちもあります。当時からもう10年と少したちましたが、現代の名工の名に恥じないような技能士になると、日々努力を重ねています。まだまだしっかり努力・勉強していきたいと思っています。現在の職場には、現代の名工を受賞している人が7名ほど在籍しているせいか、普段仕事をするうえでは、自分を含めて周囲の状況も特に変化はなく、坦々と業務を進めています。ただ、技能振興活動などで地元の小中学校や工業高校に行って話をするときなどは、プロフィールに「現代の名工」という一文が入っていると、聞くほうの意識もちょっと高くなるのを感じており、やはり現代の名工というのは箔が付くと思っています。



訓練生技能指導風景

## 第2部：パネルディスカッション

**細田** 続きまして、平成19年度に室内装飾・壁装工職種で表彰されました有限会社インテリアイジマの飯島勇様お願いいたします。

**飯島** 皆様、こんにちは。私は、一般社団法人日本内装仕上技能士会連合会の会長を仰せ付かっております飯島です。

名工という名の付いた表彰制度に、私は平成19年度に日本ではじめて壁装工として受章いたしました。その恩返しに、いまの若者がどんどんこの技術を継承していけるように努めています。建築の分野では内装工というのは絶対欠かせません。基礎をつくっても、家を建てても、最終仕上げは内装工です。全部内装で最後は仕上げるのです。

私は、昭和36年頃に東京へ出てきて、表具の世界で10年間修業しました。独立開業したときに、自分が学んだ技術がどの程度なのかということがわからなくて、日本だけでは駄目だと考え30歳でパリに飛びました。パリ、モンパルナス、シェラトン・ホテル、それから、イギリスに飛びまして、1月くらいかけて歩き回りました。

やはりパリの都は素晴らしいです。技術、デザイン的に素晴らしいものがあり、日本人も負けれないと思えました。私も奮起しまして、帰国して1級技能士の資格を取りました。45歳くらいから、各メーカー、企業から依頼を受けて、全国技能の推進のために、技能継承を強く働きか

け、講演を交えて全国を回るようになりました。

現在は東京都立城南職業能力開発センター、それにもつくり大学その他の大学にも行ったりしています。いまの若者は現状にあえいでいます。技術を伝承していかないと駄目です。しかし、いまの親方が食べて行けない状況では、人は育ちません。若者に確実に技術を教えて、次の世代を担っていただく、このことが私たちの役目ではないかと思っています。

**細田** 続きまして、平成25年度に和服仕立職種で表彰されました、職業訓練法人香川県和裁職業訓練協会の長尾理恵様をお願いしたいと思います。

**長尾** 皆様、こんにちは、長尾です。いま肩書きを紹介していただきましたが、私は個人で仕立てをしている者です。この席に座らせていただいているのが不思議なくらいで、正直なところ一主婦という立場でここに座っているような感覚です。

職种的にも、和服縫製というのは、反物をお預かりして、着物に縫い上げて納める、ただそれだけなのです。肩書きがないというのも変ですので、所属する会の名前を書かせていただきましたが、個人で技能士として頑張っています。

この職種に大きな道具は必要ありませんし、大きな場所も必要ありません。着物を仕立てられる技術が習得できれば、自分の時間調整で仕事ができます。中には会社



壁紙への和紙のデザイン張作業







縫製作業

組織にしたり、専門学校制度をとって、大きな規模で活躍されている先生方もいらっしゃいますが、私のように、1人で家で仕立てをしている人も多くいます。今日は、後者の代表としてここに座らせていただきました。

まわりをご覧になっていただいてもわかりますとおり、和服をお召しになって歩かれている人はほとんどいません。私の所属しているのは小さな会ですが、技術を伝えるよりも以前に、地道に学校訪問とか、イベント参加、そういうところから、まず日本の衣装である着物というものをアピールすることに力を入れないと、なかなか技術伝承にまでいきません。そこが、いま悩みの種になっています。

現代の名工をいただきましたが、私自身はすごくびっくりしながらも、自分が認めてもらえたということであれしかったです。しかし、時間がたってくると、表彰を受けて、私はこれからこれをどのように活かしていけばよいのだろう、恩返しができるのだろうかということに不安を感じております。技能士という立場を改めて考えていこうと思います。

**細田** 続きまして、平成27年度に製かん工職種で表彰されました三菱重工業株式会社の平野利一様、お願いいたします。

**平野** こんにちは、三菱重工の平野です。よろしく申し上げます。昨年度に製かん工として表彰していただきました。製かん工とは、鉄の大工さんです。鉄の部材を組み立



作品（創作婚礼衣装打掛）

て、設計図の要求通り、製品形状に仕上げる仕事です。普通科高校を卒業した私は、入社後の訓練期間中、工業高校卒の同期生に負けても当たり前という気持ちのまま、ただ1年間を過ごしました。その後、現場に配属され、ある仕事を任されたときに、上司から「この仕事やったら、平野が一番やな」と褒めていただきました。その一言がうれしく、また自信となったのをいまでも覚えています。

自分たちのものづくりは、個々の能力を結集する仕事から始まります。素晴らしい上司、先輩、同期生、後輩にめぐり合えたおかげでいまの自分があると感じています。今後も、人のつながりを大切にするとともに、初心を忘れることなく、微力ながら技能伝承にまい進していきたいと考えています。

表彰されたことについては、いままでお世話になった上司、先輩、後輩、同期生の代表として、自分が表彰されたのだと常々肝に銘じています。後輩たちの模範となるべく、自身の知識、経験、先輩から受け継いだ技術・技能を伝承しつつ、新しい発想を取り入れたものづくりに、仲間とともにさらなる挑戦を続けていきたいと考えています。また、若手育成や技能伝承に、いままで以上に積極的に取り組んでいきたいと考えています。

職場では、みな家族のような長い付き合いで身近なため、大きな変化はあまり感じていませんが、私自身、若手が気楽に話しかけてくれる存在となるように、これまでと変わらぬ自分であることを意識して行動しています。

### 後継者の育成や技能継承の現状と「卓越した技能者表彰制度」の果たす役割

**細田** それでは、次のテーマに移りたいと思います。パネルの皆様、それぞれのお立場から、後継者の育成や技能継承の現状と、「卓越した技能者表彰制度」の果たす役割についてご意見をうかがいたいと思います。

**田上** デンソーは自動車部品の製造業になります。後継者育成、技能継承に関しましては、私はいまデンソー工業学園の中で、技能五輪とか、工業高校課程などを通じて、若年者の技能、基礎技能の教育をしているというのが1つです。

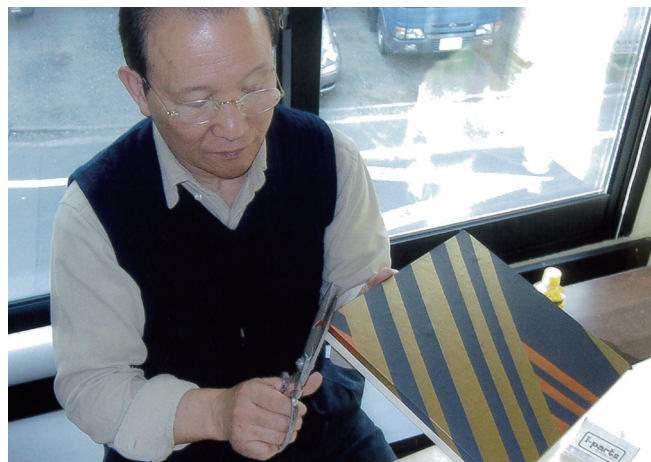
それから、もう1つは、製造現場におきましても、国家技能検定、社内技能検定、技能競技会をうまく活用して、技能継承につなげています。

しかし、やはり技能教育の基本としているのは、その現場、現場での上司、新入社員、先輩、後輩との技能教育、OJTが基本になっています。

私は訓練生を直接指導していますが、彼らの身近なところに現代の名工を受けた指導員がいるということは、彼らにとっても、この仕事を続けていけば周りに認めてもらえるのだという意識が芽生えます。それを大事にしたいです。つまり、彼らにとって訓練や仕事に取り組む上でのステータスといいますか、誇りといいますか、目標になっているという役割があるかと思います。

**飯島** 現代の名工の名において、私は職業能力開発センターで、自分の生きざまといいますか、10年間の修業の中で非常に苦労した経験を話したことがあります。私は、その中で、皆さんはこの学校に何をしに来たのかと聞きました。そうすると、技術を学びに来たのだと答えが返ってきました。では、目標は何ですかと聞くと、皆さんわからないと言うのです。これは、非常に困惑するところです。

私は、職業能力開発センターでは壁装、床、学科、図面を全部教えています。学校では、まず最初は仲間意識を大事にして、人間形成を大切にしなければいけないと思います。そこから技術を学んでもらいたいと思います。おはようございますから始まり、ありがとうございましたで終わる、これができないと駄目です。その次に、技術を学び、それからさらに就職し、独立していくべきだと思っています。



デザイン張作業

ものづくりをやりたいという人はいます。しかし、そういう人がいるにもかかわらず入ってこないのはなぜなのか。内装にしても、建築にしても、一人親方が多いです。一人親方が食べていけない状況をつくっているのがいまの状況ではないかと思います。やはり一人親方が食べていけるような状況になれば、若い人を養成して、ちゃんと育てようようになると思います。もう1つは、私は生徒を入れる場合みな5、6年で独立させます。だらだら引っ張っていくと絶対辞めていきます。独立してみな成功しているのです。

いまの若者は教え込めばきちんとできます。そして正当な価格で仕事をして若い人にも支払えるようにする、これも大きな後押しになるでしょう。技能を継承するには、まずは国がもう少し動いて、いまの制度のなかで助成金などの取組みをしていく必要があると思います。

**長尾** 私の職種では、どうしても一人で仕事を受けて、一人でこなすという方がほとんどです。着物を縫いたいからと入ってきてくれた時代はとくに終わっています。その後、後継者の育成をしたいという先生方が、学校などでうちに習いに来ませんかということもありましたが、その時代も終わりました。

先生のほうも、和裁の縫製が仕事として成り立っていないので、生徒の募集もしなくなりました。そういう状況の中で、私はとりあえず目の前で収入が得られることをやってきました。これでは、やはり後継者育成などとても無理な状態です。そこで、会というかたちを借りて、会員の方



たちが協力し合って、和服縫製という技能職種がありますということアピールしている次第です。

和服縫製についていえば、着物1枚を縫うということだけなのです。あとは特別変わったものもありません。この着物を縫うということをお客様の側では全然考えていないのです。お客様は、何を見て着物がきれいだとか、着てみたいと思うかという、色とか柄、織り、そちらのほうに目が行ってしまいます。私たち縫う側からすれば、それは管轄外のようなところでしたので、技術はすごくおざなりにされてきました。

技術がよくない仕立てだから着物が着られないかという、それは関係ないです。私が言うのもおかしいですけど、着物は形にさえなっていれば着られるのです。そこにも問題があるとは思いますが、ということは、仕立てのよさ、技術の善し悪しが、お客さんにわからないのです。

いまは後継者育成どころではないのですが、そのなかでも、私たちは、まずは着物という日本の衣装にもう少し目を向けていただこうと小さいながら努力しているところです。私が現代の名工として表彰されましたが、これはみなに着目してもらえよいい起爆剤的な表彰だと思っています。これをどのように活かしていくかが私の課題です。

**平野** 現代の名工として表彰されることが、技能者の目指す憧れとなり、モチベーションの向上につながってくると思います。変化のスピードが重要といわれる現代におい

て、現代の名工のいる職場イコール人や技能を大切に職場というイメージがあり、技能者を目指す若手に安心して技術・技能の精進に取り組んでもらえる環境が整うと思います。

技能者の育成の活動において、私自身には、所属する会社だけでなく、他の企業との交流の場もあります。現代の名工という称号があると、初対面の人であっても、すんなりと自分の話を聞いてもらうことができ、円滑なコミュニケーションもとれるようになるという利点があります。この点をうまく活用していきたいと思っています。

**栗田** 石積み関係では、私をはじめ表彰していただきました。この点は、若い人にとっては、やはり目標の一つになったのではないかと考えています。実は、私は昭和38年にこの仕事に入りましたが、そのとき安土城の修復をやっていました。昔は穴太衆（あのをしゅう）といわれていましたが、いまでは、「えっ、それ何？」というような感じで、名前すら覚えていただけない状態になっています。この仕事をそういうことにならないように、この表彰を糧にして、今後は若い人にも教えていかなければ、また受け継いでもらわなければいけないと考えています。

いま私は、この石積みを広く知っていただけるように各所で講演会や勉強会を開いています。一人でも多くの人にこの城石積みというものを覚えていただき、また後世に伝えていきたいという願いでいます。



水圧鉄管



## 第2部：パネルディスカッション

石積みについては、日本でそうたくさん修復の場があるわけではないため、いまアメリカを中心として、ドイツなどへも行って、この技術をワークショップで広めています。最初は、5、6年ほど前にカリフォルニアで、2年前にはシアトルで、そして、今回はポートランドで、それぞれワークショップを開きましたが、だんだんと広まってきたのかなというのが現状です。

私としては、これからやりたいという若者が出てくれば、惜しまずに教えるつもりでいます。

**飯島** 先ほどもお話ししましたように、毎年、後継者となる人が減ってきており、来年からピークになると思いますけれど、職人の数が絶対的に足りないという現状がもう見えています。1つ問題なのは、高校や大学などのインターンシップで、先生のところに絶対お世話になりますと言ってくれるのですが、家に帰って親に話すと、そんな小さい会社は駄目だということになってしまうケースが多いのです。

これは情けない話です。やはり自分たちがやりたいことをやる、それをかなえてあげるのが親だろうと思います。親が就職先を決めるのではない、子どもに任せなさいと。これからのものづくりのことにに対しては、親があまり口を出すと駄目だと思います。

また、高校の先生が、うちの生徒はできが悪いから職人にしてくれと言うのです。そんなふざけた話があるのかと思いました。それでは職人というのは、頭が悪いから職人になるのかということです。それは違うでしょう。職人でも計算もできなくちゃいけない。割り込みもしなくちゃいけない。

い。はっきり言って、先生自身の意識を変えていただかなければ駄目です。

**栗田** 私の仕事というのは規格はないのです。石ですから、大小、長短、いろいろな石、それをうまく組み合わせていく。そこに個性とか、感性などがものすごく出てくる仕事だと思っています。教えるのはごく基本的なこととなります。こういう具合に積んでいくとか、戸石の留め方はこういう留め方をするとか、こうするとこういう弱い石積みになるとか。そういう基本的なことは教えるのですが、石の持っていく方に対しては、本当にそれぞれ違います。ですから、講習会をやっても、やはり若い人たちの個性が出て変わってきます。私は、別にそれでもよいと思います。先人たちが作ったお城でも、やはりそれぞれ違う箇所がたくさんありますので。

また、時代によって石材が変わってきます。最初は自然石、それから割石、今度は切石というように。打込み、切込みとか、最終的にはそういう段階になってきます。一番難しいのは、やはり自然石で、うまくバランスをもたせて積んでいくのが一番難しいです。それができなければ一人前ではないと思っています。私自身は、この仕事に入って父親が一番最初に言われた言葉が、「石の声を聞け」という言葉でした。はじめはそんな話は聞き流していたのですが、10年以上たつとやはりそれが何か理解できるようになってきます。そして、その理解ができるようになったときにはじめて、ああこれが本当に穴太衆の積み方だなということがわかってきました。私は、素材を大事にするのが一番ではないかと思っています。



串崎城（下関）





## 機械化・自動化が進む中で、今後、熟練技能者が果たす役割など

**細田** では、次のテーマに進みたいと思います。機械化・自動化が進む中で、今後、熟練技能者が果たす役割などについて、皆様のご意見をおうかがいしたいと思います。

**飯島** やはり機械を操るのは人間ですから、機械だけに頼るのではなく、ユーザーと対面したときにきちんと話を、これが技能者の本分だと私は思います。

機械を操るには、それなりの名工とか熟練者にその操作を習ってやるわけです。われわれは熟年・熟練の技能士として、そういうものを確実に指導するとともに、ユーザーときちんとコミュニケーションを図るように努めなければなりません。ユーザーときちんと話を、そこから進めるのが技能士です。

**長尾** 和裁にミシン縫製はどんどん入ってきています。しかし、最後は人の手です。ミシンだけで完全な着物という

のはできません。ミシン仕立ての着物にも手縫いが入っています。手縫いの技術で最後をまとめるようになります。

和服仕立には、まだまだ機械では追いつけない部分もあります。ミシンが入った仕立ては、やはり問題があります。しかし、それが商品として納められないかということ、そういうことはありません。そこがいま私たちの課題だと思っています。

和服というと、どうしても皆さん、生地、色柄、そちらのほうに目が行ってしまいます。和服縫製の技術をもっと披露できるステージとかチャンスをいまの私たちがつくっていかないと、後に続く人たちがこの業種には入ってこないと思います。

**平野** 量産品や繰返しの製品を製作する場合については、マニュアル化された作業者の動きが機械化されていくのは、時代の流れだと思います。一方、私たちが取り組ん

## 第2部：パネルディスカッション

でいるものづくりは、一品一様であり、世界ではじめてという製品を手掛けることもあります。したがって、熟練技能者が、作り方自体を模索していくことがいまも求められています。



ガス切断作業

**栗田** われわれの仕事も、いまは、石を上げたり積んだりするのは、重機でやっています。ただ、山城になると重機が入らないところがあります。そういうときにどうしたらよいかということ、いまの私たちは全然知らないのです。そういうところからも、やはりわれわれはもっと若い人に教えるべきところがあるのだと思っています。

現在、兵庫県の竹田城で仕事をしています。たくさんのお客様が来ますが、三又を組んで滑車で石を上げたりしています。そんな古いやり方でいいのかというような目で受け取られています。しかし、そこには本当に重機が入らないので、そういう先人のやり方でやらないとできません。これは同じような修復工事にも応用できるのではないかと考えて、いま若い人たちにそれを教えています。昔の知恵も大事にしないと教えています。

**田上** 製造業では、海外を含めた生産現場で、機械化や自動化、少人化というのがどんどん進められています。また、工機とか試作部門のような少量の試作品の現場でも、数値制御の機械がほとんど主流になっています。しかし、私は、機械が入ってきて人が要らなくなるということでは決してないと思っています。機械は確かに人ができないことをできます。ただ、人も機械ができないことをやれますので、機械では効率が悪いところは、人間の手作業でやっていくことになります。

機械化や自動化や開発などに携わっている方の最終的な目標というのは、これは私の勝手なイメージですが、熟練技能者の技を機械で再現させるというところではないか、そこを目指して頑張っているのではないかと思います。機械で物をつくる場合は、その機械の能力以上のものはできません。その機械を改善するとか、材料を変えたりとか、工具を変えることで、機械の能力を上げてやる、できたものの品質を良くしてやるということが必要になります。それを向上させるところには、必ず技能者のノウハウとか知恵というのが必要になってくると思います。

熟練技能者の役割というのは、やはり今も昔も変わらないと思いますが、ものづくりの牽引役ではないかというように考えています。われわれ技能者は、機械化に追い付かれないように自分自身の技能をしっかりと磨いていかなければいけないということを感じます。

**栗田** 現在、熊本城が大変なことになっています。ただ、あの石積みの大きく壊れているところは、明治22年に震災があったときに修復した箇所、そのときに積み替えたところが今回崩壊しているとのこと。

昔からの築城当時の石積みは、はらみが出ているくらいで、崩壊はしていません。しかし、穴太衆建築というのがほとんどなくなってきています。どこが違うのかというと、一番積みやすい石材の作り方で積んでいるというのがいまの方法で、後ろがすぼんだ石、あまり奥行きのない石で積んでいます。ここが先人の石積みとはちょっと違うのです。そうすると、やはり先端だけでもつので弱い石積みになってしまいます。そのために熊本城もあのように崩壊したのではないかと思います。



竹田城修復作業



## 名工を目指して頑張っている若年技能者へのアドバイス

**細田** ありがとうございました。それでは、最後に、名工を目指して頑張っている若年技能者へのアドバイスを、皆さんから一言ずついただきたいと思います。

**長尾** 最近では、情報は簡単に手に入ります。しかし、技能というのは、積み重ねていって、経験していくことによって磨き上げることが重要です。それをするのが技能士だと思えます。ですから、いまから技能士を目指す方は、情報として得る部分は大いに結構ですけど、とにかく一生懸命自分でやってみることが大事です。能書きよりも、まず手を動かさ、体を動かさずです。とにかく技能が自分の身に付いた、自分のものになったと思ってから、次のことを考えてほしいです。

**平野** 技能者として腕を磨くことも大切なのですが、所属する組織、チームの一員として、いま求められている役割を精いっぱいやり遂げることに取り組んでほしいと思えます。組織、チームを輝かせようと頑張ることで自分が磨かれ、いずれは、自分が光り輝く存在になっていくものだと思います。私の職場ではチームで取り組んでいくので、チームの仲間に対して誠意をもって対応していけたらよいと思えます。

上司や先輩の喜ぶ顔が見たい、何とか役に立ちたい、同級生には負けたくない、後輩の輝く姿が見たい、必ず一人前に育てたい。こうした人と人のつながりを大切に、素晴らしい仲間を得ることで、ものづくりの楽しさ、やりがいを感じることができたら、それだけで十分に資質はあると思えます。

**栗田** 私の仕事では、辛抱、努力、忍耐、そういうものしかないのではと思っています。われわれの仕事というのは、教えてくれなければその親方の仕事を見て盗めとよく言われますけれど、私も先代からそのように教えられてやってきました。しかし、いまの若い人はそれができなくて、これはこうだろう、こうだったらこうするのだというように、本当に手取り足取り教えているところなんです。できるだけ、自分で考えて工夫するようなことをやっていただければよいのではないかとと思っています。

**田上** 私自身は、現代の名工を目指して勉強してきたわけではなくて、まずは技能五輪の世界一を目指して腕をひたすら磨いてきました。いま技能の道に取り組んでいる方々は、まずは強い気持ちと大きな目標をもって、それを信じて努力を続け、その道を進んでいき、まわりから認めてもらえる技能士になっていただきたいと思えます。

いまの時代は情報化社会です。そして、いろいろな業種や要素が手を取り合って、新たな技術・技能が生まれてくる時代ですので、1つの道プラス広い視野をもって知見を広げてもらうことで、今後の新しい時代にあった現代の名工になれるのではないかと思います。

**飯島** 私が思うには、技術を学んだら、まず社会貢献です。やはり社会貢献をしないと、技術の開発も、道具の開発もなかなかできないのです。もう1つは、異業種交流です。いろいろな技がありますから、異業種交流をすると自分がどうなのかというところが本当に見えてきます。

いまはいろいろな壁紙が出ています。その中で、どうやったらうまく仕上がるのかというのは、やはり自分の努力と感性です。そこから生まれるものは裏技になってきます。ぜひ努力して、裏技を身につけていただきたいです。そこまで達しないと、名工の域に入っていないかもしれません。

私は現代の名工として表彰してもらうために頑張ったわけではありませんでした。たまたま後から付いてきたというのが現実です。現実的には、自分で自己努力をしないと、やはり名工につながらないと思えます。あとは、社会貢献をしながら、皆さんと異業種交流を行ってくださいということです。

**細田** それでは以上で今回のパネルディスカッションを終わりたいと思います。パネラーの皆様ありがとうございました。

一般社団法人 全国技能士会連合会  
<http://www.takuminowaza.net>

**JAVADA**  
JAPAN VOCATIONAL ABILITY DEVELOPMENT ASSOCIATION

「卓越した技能者の表彰制度(現代の名工)」の詳細は、厚生労働省のホームページをご参照ください。  
<http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/syokunou/meikou/>